



# 筑紫女学園大学リポジット

## A Study of New Zealand Playcentre

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 一ノ瀬, 節子, ICHINOSE, Setsuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/263">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/263</a>

# ニュージーランドのプレイセンターに学ぶ

一ノ瀬 節子

## A Study of New Zealand Playcentre

Setsuko Ichinose

### はじめに

平成15年7月に「次世代育成支援対策推進法」が制定され、行政機関や各事業主においても行動計画の実施が推進されている。平成16年4月に、本大学は、女性のライフサイクル支援を目的としたサテライト・スタディオ“みんな塾”を天神イムズビルに開設した。その活動の中心として、子育てに悩む若い親世代への子育て支援と育児を学ぶ生涯学習の場を提供し、地域貢献事業を開始した。しかしながら、どのような子育て支援が望ましいのか、どのような子育て学習プランやその専門スタッフを養成すればよいか、その支援のあり方についての研究と実践は、わが国ではまだ始まったばかりである。著者は、平成16年11月に短時間であったが、ユニークな子育て支援活動として著名なニュージーランドのプレイセンターを主に見学する機会をえたので、その報告をまとめ今後の課題を明らかにし、将来への子育て支援の方向性を探っていきたい。

### 1. ニュージーランドの乳幼児教育

ニュージーランドでは、1986年に社会福祉施設であった保育所が教育省に移され、すべての就学前施設が教育省の管轄下に一元化された。子どもの成長には、単なるケア (care) だけでなく、教育 (education) が必要だと言う考えから、両者を統合した“エデュ・ケア”という新しい概念を基に運営されている。

現在は、多種多様な子育て支援サービスが用意されており、自由に選ぶことができる。また親の就労の如何にかかわらず、どの保育サービスを利用しても公的な補助が受けられるような平等原則のシステムが確立した。

就学前の乳幼児教育の中核を担ってきたのは、90年以上の歴史を持つ無償の幼稚園である。最初は、貧困家庭子どもの救済を目的とする慈善運動でスタートしたが、その幼児教育の成果が認められ公的な教育施設として全国に普及した。『ARCレポート2005』によると、2003年時点で幼稚園数は609ヶ所である。日本と大きく異なるのは、公立の幼稚園であっても、親が幼稚園の運営・管理に積極的に参画し、保育者と協同で運営している特徴がある。

近年、最も多く利用されているのは保育所で、1673ヶ所設置されている。ここには、公立幼稚園

以外の私立幼稚園やプレスクールなど、さまざま運営母体（キリスト教会、企業、NGOなど）による保育施設など幅広く含まれている。女性の就労率の上昇と共に設置数も増え、就学前児全体の4割が利用している。全日保育、半日保育、一時保育などその運営も形態もさまざまである。

そして、ニュージーランドのユニークな子育て支援活動として有名なプレイセンターやテコハンガレオ（先住民族マオリを対象）がある。ここでは、親子での参加を前提とするために、近年やや減少傾向にあるという。プレイセンターの詳細については、後述する。

その他として、親たちの自主的な集まりのプレイグループや家庭で託児する保育ママやベビーシッター、あるいは、「プランケット協会」による乳児検診や育児相談など、ニュージーランドでは、実に多彩な子育て支援メニューがあり、自由に選ぶ事ができる。

また他方では、親自身の子育てを学ぶ教育が必要だと言う視点から、「親は最初の教師」(Parent as a first Teacher)略して「PATプログラム」が、1992年より教育省の指導のもとに全国一斉にスタートした。

また1996年には、乳幼児教育における全国共通の基本指針として「テ・ファリキ」（マオリ語で縦糸と横糸が織りなす織物の意味）が完成した。これは、1991年より600人を越える現場の保育関係者のコメントが集約され議論が積み重ねられた上で作成されたものである。全国の保育機関は、この「テ・ファリキ」を中心にしながら、日々の活動プログラムを作り運営している。この「テ・ファリキ」は、優れた乳幼児教育プログラムとして高く評価され、オーストラリア、デンマーク、ノルウエイ、ドイツなど諸外国の保育にも大きなインパクトを与えた。なお、幼保統合した保育者の養成も改正され、1998年より3年制の教員養成カレッジでおこなわれている。

注) ニュージーランドでは、5歳の誕生日から小学校に入学していく。従って、年度一斉の卒園式や小学校入学式はなく、一人ひとり入学日が異なる。

## 2. プレイセンターについて

### (1) 歴史と展開

ニュージーランドのプレイセンターは、1940年代に、郊外に住む若い親が子育ての孤立や不安を解消して、子どもたちを遊ばせながら子育てを学ぶ目的で開設され、1960年代に各地域に急速に広まり、既に50年の歴史を持っている。現在は、全国組織である「ニュージーランド・プレイセンター連盟」の元に、全国32地区の協会に属し各地域で開設されている。

但し、前述したように、プレイセンターは親子での参加が主体であるために、母親の就労率が上がるにつれ、設置数が低下する傾向にある。1990年には621箇所あったものが、1999年は523箇所、2003年には482箇所と減少している。

(表1) ニュージーランドの乳幼児施設数(2003年7月)  
出典:ARCレポートニュージーランド2005

幼稚園	609	14%
保育所	1673	39%
プレイセンター	482	11%
テコハンガレオ	526	12%
その他 { 各種育児グループ 各種家庭内託児など含む	1010	24%
合計	4300	100%

その点を今回訪問した Shirley プレイセンターで尋ねた所、『Playcentre Journal 119-2004』を見せながら、「Otago地区では、プレイセンターの利用がまた増えて来ています。特に2歳以下が漸増しています」と教えてくれた。

また、ある母親は、「私は以前、保育所に預けて働いていましたが、子どもは自分の手で育てたいと思い、パート勤務にかえてプレイセンターに参加しています。ここで娘と過ごせて満足です」とインタビューに答えてくれた。このように、親自身の考えでいろいろな保育施設を選び、子どもの年齢に応じて使い分けているようだ。フルタイムで働き保育所を利用する母親が急増する中で、プレイセンターの良さを再認識している親も少なくないということであろう。

さて、ニュージーランドのプレイセンターが各国で注目される理由は、親が主体的にセンターの運営や保育活動に参加し、親と子が一緒に成長する“Families growing together”の機会を提供していることにある。

プレイセンターのロゴマークは、その理念を象徴している。今回訪問したカンタベリー地区のプレイセンター案内パンフレットには、「ようこそ、プレイセンターへ、子どもと共に学び成長しましょう」と呼びかけ、次のようなメッセージが載せられている。

例えば、親たちには、

- \*あなたの価値観を尊重します。
- \*あなたをサポートする場所です。
- \*友人を作れるでしょう。
- \*子どもの教育に積極的に関わられます。
- \*子どもと育児についてさらに学べます。
- \*ここでのアイデアを家庭でも応用してください。
- \*あなたがさらに学び成長できる機会があります。
- \*適切な教育が少ない費用でえられます。
- \*あなたの家族のすべての子どもたちにサービスできます。
- \*子どもにとって安全で幸せな場所だと信頼してください。

とアピールし、「私たちは、私たちの子どもをケアし教育する責任があります。子どもの発達を理解しペアレンティングの技術を向上させ、子どもたちとの活動やセンターの運営などに参加してみませんか」と親自身が育児を学ぶことを積極的に呼びかけている。このようにプレイセンターでは、親自身が多様な学習講座へ参加することが求められているが、さらに専門的なスーパーバイザーを目指したいと思う親には、かなりレベルの高い「保育者養成プログラム」が用意されている。この学習コースに参加し研修ポイントを積み重ねれば、教員養成カレッジ卒業と同等の資格が取得できる。子育てと職業資格を連携させた社会人教育の画期的なシステムといえるだろう。以前には、例えば、学歴のなかったマウイ族の女性たちがその子育て支援活動を通じて実力をつけ、指導者として育っていく機会を提供していたという。しかし現在は、女性の進学率が上がり、このコースで指導者となる例は少なくなったという。

広報誌「Playcentre Journal」は1952年から発行され、各地域のプレイセンターの活動を掲載している。ピクニックや園芸、泥んこ遊びなど家族ぐるみで豊かな自然の中でワイワイ遊んでいる光景が多数紹介されている。

(図1) プレイセンターのロゴマーク

PLAYCENTRE



(写真1) 『プレイセンタージャーナル』119—2004



## (2) 運営・保育活動

プレイセンターの利用は、カナダのドロップインのように、いつでも好きな時に利用できるのではなく、各施設に年会員を登録し決まった曜日の時間帯に参加する。開設日は各所ごとに異なるが、多くの場合は、週3～4日の午前中に開かれている。大体25人の定員で、5人の保育スタッフがつくが、専門スタッフ（スーパーバイザー）は2名で、あと3名は親が当番制で参加し協力しながら運営している。5人の子どもに1人の大人が最低基準である。

利用希望者は、まず年度初めに利用したいプレイセンターを選び、会員登録し1年間に利用する曜日や回数を決める。週2～3日の利用が多いが、4～5歳児は毎日来る子も少なくないという。利用回数に応じた参加費を支払うが、国の補助があり1回につき1～2ドル(2005年10月現在1ドル=75円)程度で利用できる。0から2歳半までは、必ず親が付き添って参加することが義務づけられており、入会するとまず親としての心構えなどレクチャーを受ける。といっても難しい内容ではなく、子どもへの接し方の基礎や玩具の選び方など具体的な育児方法やセンターでの利用の仕方また当番の心得などである。

子どもが2歳半までに、親たちは子ども連れで参加し、周囲の親たちと交流しながら、子育てを学んでいく。2歳半を過ぎれば、必ずしも親が同伴する必要はなく、交代で当番の日だけ参加し、母親を育児から解放している。

日々の遊びや活動のプログラムは、親とスーパーバイザーの話し合いで進められ、いろいろな学習会やワークショップあるいはバザーなどいろいろな企画を自分たちで立案し実行していく。

このようなプレイセンターは各地域に開設されているが、どこのセンターを利用するかは親が選ぶ。人気があるセンターには、遠方からでも車で通園し、見学希望者や空席待ちの親子も多く、募集期にはすぐに定員に達するという。その一方では、人数が集らず閉鎖されるセンターもある。3ヶ月に一回、プレイセンター協会による評価チェックがあり、センターの質の維持につとめているという。

活動のカリキュラムは、おおまかな時間割が決められているが、2時間半を1セッションとして、午前はおよそ9時半～12時頃に開園されている。

カリキュラムは、前述の「テ・ファリキ」に沿った子どもの自由な遊びを最大限に保障する“child-centred”アプローチが中心である。自由な遊びを通じて、子どもは創造性や社会性を身につけ成長していくという考えなので、いわゆる教え込みの学習や一斉保育はおこなわれない。砂遊び、水遊び、お絵かき、積み木、フィンガーペイント、ままごと、運動、大工遊びなど多種類の遊びコーナーが準備され、子どもが自発的に興味や関心のある遊びを選択し、保育スタッフは、見守りながらその遊びが発達に繋がるように援助を行っている。

### (3) プレイセンターの見学

さて、実際のプレイセンターを見学させてもらったのは、クライストチャーチの郊外にある Shirley プレイセンターと Russley プレイセンターである。

どちらもこじんまりした木造一軒家で庭があり、日本の多くの幼稚園や保育園に多い立派なコンクリートの園舎ではない。まず訪れた Shirley プレイセンターでは、午前9時15分に開きスタッフと当番の母親たちが受付や遊具の準備をするなか、親子がボツボツと通ってきた。すぐに庭に飛び出す子や室内で絵の具を出して塗りはじめる子など自由に遊ばせている。よほどの迷惑や危険なことがない限り大人たちは干渉しない。それでも、女の子がはさみを使い始めると、横にいた母親がさり気なく使い方を教えている。「あなたのお子さんですか？何歳ですか？」と聞くと「いえ、この子は私の子ではありません。私の子は、ホラ、外で遊んでいますよ」と庭の方を指さした。親た

ち全員で子どもたちを見守っている自然なチームワークが感じられた。

10時頃にモーニング・ティータイムになり、親子でテーブルに集って持参したお菓子や果物を食べたりお茶を飲みながら、連絡事項を伝え合ったりおしゃべりを楽しんでいる。その後また自由な遊びが続き、11:45頃には、反省会のようなものがありその後片づけとお掃除をして終わるといふ。

Shirley プレイセンターのスーパーバイザーのスーザンさんは、「日本の幼稚園児が舞台の上で合唱したり踊ったりする遊戯会の様子をビデオで見ました。私たちはあのような集団演技はしないので、とても驚きました」と言われた。運動会のような行事もないという。「“みんな塾”の活動はネットで拝見しましたよ。同じような活動を実際にやっているあなた方の訪問を歓迎します。」といろいろな質問に丁寧に答えてくれた。彼女もそうであるが、専門スタッフは、一目で先生！とわかる存在ではなく、親たちと共に行動しながら、それとなく参加者全体を目配りしているような役割を演じている。

「落ち着いた子や、問題のある子にはどういう風に対応されるのですか？」と聞くと、「その子の親も交えて親たちがみんなで対策を考えたり、夜や日曜日に、その問題の専門家を呼んで勉強会を開いたりして、解決していく」という返事だった。いろいろな子どもに対して、みんなで考えながら共に育てていくという活動をごく自然なこととして話され、傍らの母親たちもにこにこ頷いていた。

逆に言えば、そういう教育熱心な親が集まるセンターは活動も活発で評判がよいが、親たちがあまり協力しないセンターは、トラブルも発生し低調になって閉鎖されるのだろう。親たちの熱心な参加意識がなければプレイセンターは、その良さが機能しない仕組みになっている。

プレイセンターなど子育て支援施設には、国からの補助金が出ているが十分ではないので、親たち自身で、砂場を作ったり玩具の修理をしたり、またバザーを催したりなど不足を補っているといふ。資料のコピーをお願いしたら、「コピー機を置いてないので」と申し訳なさそうにいわれた。

Russley プレイセンターでは、父親の姿が見られた。最近、父親の参加も珍しくないという。育児休業は、両親のどちらがとってもよいので、収入の少ない方が休む率が高く「彼の所もそんなのでしょ」と屈託がない。「男性が参加すると、施設の修理や外遊びを手伝ってくれて助かりますよ」と歓迎している様子であった。庭に出た時、のこぎりや金槌など大工道具を入れた箱が無造作に置いてあったのは驚いた。子どもたちはこれで遊ぶというが、日本ならば、安全管理の面で厳重注意になるだろう。

このように、ニュージーランドの親たちの子育てを見ていると、万事ゆったりとおおらかであり、赤ちゃんから5歳までの異年齢の子どもと親たちが自然に集い大きな家族のように過ごしている印象を受けた。裸足で庭を走り回っている子もいるが、全体が25人程度に抑えられているので、充分に大人の目が届き騒々しいという感じは全くない。自分の子も他人の子にも区別なく平等に世話をし、悪いことはその場で注意し、親たち全員で子どもを育てているという印象が強い。玩具類も無造作に置かれ、きちんと整理整頓された清潔な空間というより、雑然としているが各自の責任のもとに自由に気楽に過ごせる場所という雰囲気であった。

(写真2) Russley プレイセンターの前景



(写真3) 庭でお父さんも一緒に遊ぶ (Russley プレイセンター)





(写真4) 朝のティータイム風景 (Shirley プレイセンター)



### 3. プランケット協会とファミリーセンター

次に、プランケット協会が開設しているオークランドの市内のファミリーセンターも訪問できたので簡単に報告したい。プランケット協会は、乳児の死亡率の高さを憂慮した医師によって始められたが、その活動に賛同した当時のプランケット総督夫人が尽力し、1世紀に渡ってニュージーランドの母子保健に大きく貢献してきた。

協会本部はオークランドにあり各支部と連絡しながら、乳幼児の発達検診、育児相談、電話相談、出前のお産教育、遊具や育児用品、乳母車やチャイルドシートの貸し出しなど、多岐にわたる育児支援活動をおこなっている。活動の主な担い手は、プランケット・ナースと呼ばれる看護婦の女性たちで、0～3歳の乳幼児の家庭には直接に訪問して、育児の指導や助言をおこない成果をあげている。

またファミリーセンターも全国24箇所に開設され、孤独感に悩み育児疲れしている母親が、気軽に訪れて休憩し相談できる居場所として利用されている。

「プランケットの施設を訪問するのですよ」と乗車したタクシーの運転手さんに言うと、「ああ、うちの子どももお世話になりました」と感謝していた。

このように長年のプランケット協会の活動は、国民の間に定着しており信頼が厚い。ファミリーセンターという名称から立派な建物を想像しがちだが、こども看板がなければ見過ごしてしまうような小さな民家であった。責任者の年配のナースとボランティアの女性が迎えてくれた。

玄関から居間、食堂と続く部屋には明るい日差しが溢れ、育児中の母親が気軽に立ち寄り、相談したりお茶を飲んだりできるようにゆったりとしたソファが置かれていた。ベビーベットだけでなく、母親も休めるように静かな休憩用のベッドルームが2階に用意されていた。

午前中には、5～6人の母子に対して母乳指導があったということでプリント類が置いてあった。「赤ちゃんを持つことは、特別な素晴らしいことです。私たちは、“すべての赤ちゃんが人生のべ

スト・スタートを切れるように” 応援します。赤ちゃんが生まれたらすぐに連絡してください。プランケット協会は、あなたとあなたの家族をサポートします」というメッセージが書かれていた。

ベテランのナースと産後のうつ病や十代の妊娠などについて語り合い、どの国も同じような課題を抱えているのだと実感した。現在は、妊産婦対象の講座や十代のベビーシッター講座など幅広く対象が広がっていると言う。

部屋に置かれたベビーバスケットには、白い肌の人形と黒い肌のお人形が仲良く入れられており、多民族との共生が自然に伝わってきた。ちなみにいろいろな看板や育児書にも英語とマウイ語が併記されている。

(写真5) プランケット協会のファミリーセンターの居間



(写真6) ファミリーセンターに置かれたベビーベット



## 4. おわりに

今回の見学は、非常に短時間で限られた一部分を見聞できたに過ぎないが、わが国の今後の子育て支援のあり方について学ぶべき点を考えたい。

### (1) 社会全体で子育て支援を

ニュージーランドは、日本に比べ経済的にも決して豊かな国ではない。訪問先のプレイセンターには、コピー機もなく玩具類も高価なものではなかった。しかし、どの施設を訪れてもボランティアの笑顔があり、みんなで支え合って子どもを育てようという国民のコンセンサスが強く感じられた。これは、開拓者の国としてキリスト教を背景に国づくりをしてきた歴史的な背景によるものであろうか？ 松川由紀子氏の『ニュージーランドの保育と子育ての支えあい』には、富裕層の女性たちが貧窮家庭の子どもたちと家族を支援する活動に熱心に取り組み、社会を変革していった過程が紹介され、世界最初の婦人参政権が獲得(1893年)されたのがニュージーランドであったことが納得できた。この国の社会福祉や教育におけるきめ細かなサービスは、このようなボランティア活動が下支えしており、人々の熱意と実績が、国の教育施策や福祉制度を動かしてきたといえるだろう。

私たちはまず、「なぜ子育て支援が必要か？」を広く問ひかけ国全体で育児の大切さ、特に乳幼児期の重要性を啓蒙することが必要だろう。次世代育成支援対策推進法の制定により、子育てへの関心が高まり子育てする家族へ多様な支援策が広がることを期待したい。行政主導よりも民間主導、施設建設よりも運営の充実、公平な保育サービスなど子育て支援施策において、ニュージーランドに学ぶべき点は多いと思われる。

また、親自身もよりよい育児環境を作っていこうとする積極性が必要だろう。日本では、支援施設を準備しても、親はお客様として参加するだけで自らは全く動こうとしない、また誰も手伝いや役員を引き受けない、バザーは金を払えばすむとする親たちの無協力を嘆く声は多い。みんなで子育てを支え合うという国民的意識がない社会では、家族・学校・地域の連携がうまく機能しない。その意味でも、各地で芽生えている親たちの自主的なグループ活動は、新たな地域ネットワークを築く可能性を示すかもしれない。

### (2) 子どもの発達を主軸にした支援を

ところで、これまで国の保育対策は、少子化対策の一環として母親の就労を促進させる面が強調されてきたように思われる。「エンゼルプラン」等で、保育所の増設や夜間保育や延長保育、0歳児保育などが推進されてきたが、この結果、親の負担は軽減されたが、子どもを家庭から離す方向を強めたともいえないだろうか？

幼児期における家庭での親子関係の希薄さや愛情の剥奪体験が、子どもたちの問題行動や心身発達の障害に深く影響し、虐待の世代間連鎖ともつながっていくことは周知である。早期から家庭ではなく集団での保育を中心にするのなら、そのために子どもの健全な発達についてさまざまな角度からの研究を集積し、統合的な理念を基に進めなければ、安易な育児外注化が進む危険性がある。例えば、心理臨床家の目からすれば、子どもが病気の時に病児を預かる保育園を増設するよりも、親が休暇をとり看病してやれるような制度を推進することの方が、子どもの治療にも効果的で

あり、まずその方向が検討されるべきだと考える。乳幼児にとっての家庭の果たす役割についてコンセンサスを形成し、仕事と家庭がバランスよく調和できるように育児休暇やワークシェアリングなど、労働条件改善や再就職制度を充実させ、親たちがもっと子育てに関わり、育児を楽しめるような社会環境を整えることが最優先の課題であろう。

その意味で、「親が、子どもを生み働きやすい社会」から、「子どもが、健全に育つことができる社会」へ視座の転換が必要ではないかと考える。

### (3) 親になる教育

最近では、出産前に赤ちゃんを抱いた経験もなく核家族で子育てをする若い親たちが増えている。子どもの発達や育児方法を学ぶ機会もないまま親になるので、長時間にわたり幼児にテレビを見せ続けたり、「抱き癖がつくと自立心が育たない」と泣き続ける子どもを無視したり、キッチンとつけをしななど不適切な育児が多くなり、悲惨な虐待事件は後を絶たない。

これは、少子化よりも更に深刻な危機をもたらすと予想され、親になる教育や子育てについての学習の機会を提供することが各国で始まっている。

ニュージーランドで全国一斉に実施されたPATプログラム（Parent as Teacher）は、親になるための学習プログラムであり、これは、米国で普及していたものを取り入れたものだという。カナダでも「ノーバディズ・パーフェクト」という子育てのテキストが政府監修の元に出版されている。ここには、「最初から完璧な親はいません。周りの人の助けを絵ながら親になっていくのです」と自信を持って親の役割や子育ての方法が学べるように平易な言葉で書かれている。

わが国でも、若い世代に子育てを学ぶ機会と適切なプログラムを準備することが早急に望まれる。ニュージーランドのプレイセンター方式は、親子が共に関わりあいながら子育てを学びシステムとして学ぶべき点が多いと思われた。

### (4) 支援の専門家の養成

家族に対して子育ての指導や助言をおこない、親と子が安心して過ごせる居場所を提供し、医療と福祉、家庭と学校などの連携をはかり、地域のネットワーク作りを推進する子育て支援の専門家がこれからは必要になってくるであろう。どんな立派な支援施設を作っても、そこにきちんとしたスーパーバイザーがいなくては、親も子も安心して集ってこない。どのような専門性と資質が望まれるのか？ よく検討し人材を育成する必要がある。ニュージーランドでは3年制の幼保統合の指導者養成講座が開設されているが、それらについても参考になるだろう。

## ま と め

以上、ニュージーランドのプレイセンターの見学をもとに、日本が学べる子育て支援の在り方を考察した。わが国の文化や習慣を考慮した子育て支援とはどういうものか？ 早急に検討する時期が来ていることが再認識された。

そしてまた、ニュージーランドの人々が、質素であるがゆつたりと家族で過ごす時間を大切にするライフスタイルに接して、私たち自身の人生観や国の進むべき方向など、子育てをテーマに改めて考えさせられる点が多かった。

## 参 考 文 献

1. 『ニュージーランドの保育と子育ての支えあい』 2000 松川由紀子 溪水社
2. 『世界に学ぼう子育て支援～ニュージーランド～』 2003 池本美香 フレーベル館
3. 『育児不安～ニュージーランドのプレイセンター』 2002 大日向雅美 心の科学103
4. 『子育て支援とNPO』 2002, 原田正文 朱鷺書房
5. 『子どもの愛し方が分からない親たち』 1992 斉藤学 講談社
6. 『Weaving Te Whariki』 2003 Joce Nuttall
7. 『Playcentre Journal』 119-2004, 120-2004,
8. Plunket 協会及び Playcentre 発行のパンフレット類。
9. <http://playcentre.org.nz/>
10. 『ARC レポートニュージーランド2005』 世界経済情報サービス

注) 本論文は、筑紫女学園大学／短期大学の平成16年度特別研究助成を受けた。